

アントレプレナーシップを 育む高校事例

半径5メートルの身近なところから課題を見つけ、
各々の学校に適した道筋で生徒たちのアントレプレナーシップを育む取組に
チャレンジしている高校事例を紹介します。

Case1

自分ごと化しやすい課題に、 体験的に取り組む“50センチ革命”を テーマにした探究学習

金沢高校（石川・私立）



元・探究企画室
寺西 望先生(右)、
森下 広大先生(左)

地方で生きるうえで必要な 起業家精神を醸成したい

金沢高校では今年度から、2年生の総合的な探究の時間(以下、探究)で生徒が選択する分野として、「起業家教育」を取り入れている。

同校の起業家教育の導入は2018年度にさかのぼる。この年に、中小企業庁の「学びと社会の連携促進事業(起業家教育)」に参加。

地方創生や高校魅力化プロジェクトを手掛ける(株)Prima Pinguinoの藤岡慎二氏を講師に招いた「起業家教育プログラム」を実施した。この事業への参加を決めたのは、当時探究を担当する部署の副主任だった寺西 望先生だ。

「地方で生きていくには、起業家精神が大事だと考えています。都市に比べて雇用機会や、消費者として楽しめるサービスなども多くはありません。受け身で雇用やサービスを得るのでは

取材・文／長島佳子



なく、自ら新しい価値や機会を創って提供する側になった方が、生徒たちが自分の好きなことをしたり、充実した人生を送れると思っています」(寺西先生)

2018年の「起業家教育プログラム」は、夏休みの5日間で実施。1～3年生の希望する生徒を対象とした。身近な人を幸せにする「50センチ革命」をテーマに、高校生活で感じる違和感を発見し、解決策を考え、アイデアをまとめ、プレゼンテーションを作成する手法を、地元で活躍する起業家などの講話も含め、理論から実践まで学んでいった。

「このときは企画から実施までを藤岡さんにお任せしましたが、プログラムのレベルが高く、生

徒たちが消化不良な部分もありました。そこで、次年度からは本校の生徒に合わせ、理論の部分は減らし、実践部分に絞り込んだプログラムを自分たち教員が中心になってやってみようと考えました」(寺西先生)

生徒に育みたい資質としての 起業家精神は授業でも養える

取組を通して寺西先生が大切にしていたのは、「行動すること」だ。

「課題を見つけるのも、解決策を探すのも、外に出て観察したり、人に話を聴いたりする行動や体験が欠かせません。だからフィールドワークを重視しています。元のプログラムの“50セン

金沢高校・起業家教育の流れ



「“革命”というテーマは、生徒が身近なことから課題を自分ごととして捉えやすく、フィールドワークをするうえで動きやすい範囲という視点からも大切にしていきたい切り口です」(寺西先生)

翌年以降も夏休みに希望者対象で実施してきたが、部活動に所属する生徒が参加しづらいことが課題だった。そこで、今年度は総合的な探究の時間に起業家教育を組み込むことにしたのだ。

「自ら課題に向かって行動していくというアントレプレナーシップは、どの生徒にももってほしい資質・能力でもあります。すべての生徒が対象となれるよう、探究の授業の選択肢として組み込むことにしたのです」(寺西先生)

失敗や行き詰まりも含めた 体験と過程で学びが深まる

探究では、生徒は2～5人一組のチームとなり、チームごとに20の分野から選択して課題研究を行う。基本は学問ごとに分野を設定しているが、そのなかに、起業家教育を入れた。

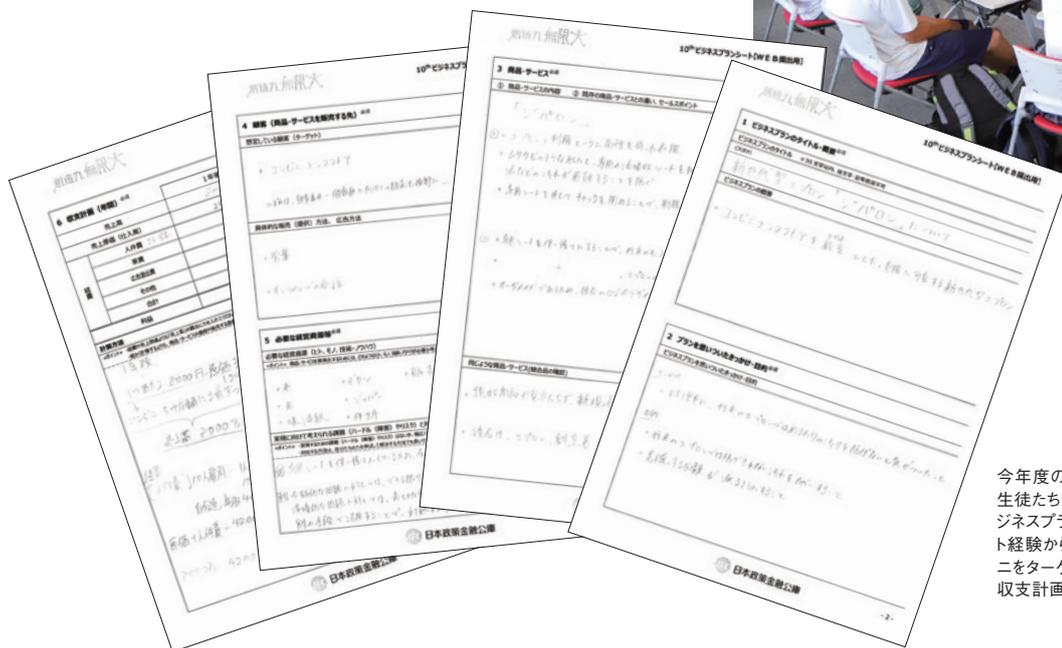
起業家教育チームのプログラムは、昨年度まで5日間20時間で実施していた内容を踏襲し、それを1年間35時間の探究の時間に割り振って実施している(9ページの図参照)。

寺西先生と共に「起業家教育プログラム」に携わってきた森下広大先生は、失敗や行き詰まりも含めて、生徒たちが体験を通して多くの学びを得ていると感じている。

「生徒たちにとって、課題も解決策も簡単に見つけられることではありません。行き詰まりも経験しながらそのときにどうするか、自分一人ではなく、仲間と共に考える過程で学ぶことが大きいです。我々教員も伴走者として、すぐに答えを言わないなど、どんな声かけをすると生徒の学びが深まるのかを考える機会になっています」



地元の起業家などからなる審査員の前で、自分たちのアイデアをプレゼンする生徒たち(写真は昨年度の実施例)。



今年度の探究で起業家教育を選択した生徒たちが現在進行形で作成しているビジネスプランシート。コンビニでのアルバイト経験から、課題を見つけ、全国のコンビニをターゲットとした商品開発を検討中。収支計画もびっしりと書かれている。

(森下先生)

寺西先生は起業家教育について、自分なりの定義はまだできていないと言う。

「起業家を育成するという目的ではなく、誰かを幸せにする解決策を見つけるという点において、他者の存在が大事な取組ではないかと考えています。探究全体では、自分の興味の範囲での課題でも良いのですが、起業家教育を選択した生徒には他者視点をより意識してもらえ

たらと思います。一方で、アントレプレナーシップは、自分で解決したいと思う課題を見つけて、そのテーマに没頭し、自ら動き出す力だと思います。だからすべての生徒に必要です。“50センチ革命”は探究の全分野に共通していて、身近なところから課題を見つけ、行動することで解決策を探していくという意味では、本校の探究全体がアントレプレナーシップ教育なのかもしれません」(寺西先生)

学校データ

1928年創立／普通科(全日制)／生徒数1281名(男子724名、女子557名)。現在、Sコース、特進コース、進学コースの3コース制。質実剛健の校訓の下、教員も生徒と共に成長していく“共育”を理念としている。

体験することで、考える力が鍛えられる



2年生 小出啓太郎さん(左)、林 蒼太さん(右)

「お客さんを集めるための方法に興味があったから」と、探究で起業家教育を選択した生徒に、現在進行形の授業についてお話を伺いました。

理想の商品を作る過程を 実社会の段取りに沿って体験

小出さん 僕たちは自転車通学をしており、金沢は雨が多いのですが、今売られている雨合羽ではどうしても足元が濡れることに課題を感じていました。僕たちのチームではそれを解決する商品開発を目指しています。まずはどんな雨合羽がいくらくらいで販売されているか、市場調査をしました。自分たちで作るとしたら原価がどれくらいかかるのか、素材の価格の相場なども調べました。競合する類似商品と比較しな

がら、どうしたら自分たちだけのアイデンティティを見つけられるかに苦労しています。

林さん 競合商品と比較しながら、価格競争でも負けないようにするには、特徴を絞り込んでそぎ落とさなければならないこともあると考えさせられました。消費者とはどんな人なのかを考えるなど、社会で実際に行われているマーケティングを体験できているのが面白いです。

抽象化の概念が身につく、 他者の意見で 視点の広がりを実感

小出さん この授業を通して、人の話を聞いたり質問をされたときに、それが難しい内容だとしても、「これってつまりこういうこと?」と、自分が理解できるほかのことに例えて

捉え直して考える、抽象化する力がついたと思います。振り返りがあるので、そのときに体験中に自分が悩んでいたことを反芻できているからだと思います。

林さん 発表の機会が多いので、ほかのクラスやチームの人たちの考え方を知ることができ、「こんな見方もあるんだ」と刺激になります。ほかのチームと意見交換するとき、まずは自分の意見をかためてから視点の違う人の意見を聞くと、そこからどんどん枝分かれしていろいろなアイデアが広がっていくのが楽しいです。商品開発という言葉聞いたことはあっても、実際にやってみるとではまったく違うことに気づけました。体験してみて初めて、考える力や発想力が鍛えられるのだと知りました。



生徒の真の主体性の育成を目指し、 教育課程外でスタートした 「三高みんなの食堂プロジェクト」

三本松高校（香川・県立）



校長
泉谷俊郎先生



教育研究部部长
3年生担当
森 麻衣子先生



教育研究部
1年生担当
兼島 翼先生

自分たちの学食を良くする 生徒主体のプロジェクト

生徒に育みたい力として主体性に重きを置く三本松高校。生徒たちの内発的な主体性を発揮できる場を提供しようと、教育課程外での生徒プロジェクトを複数進行している。

「主体性は『主体的に学びなさい』と指示されて育まれる力ではありません。自ら『やってみたい』と思うことで生まれます。本校では授業など従来の教育課程の枠の中で主体性を発揮することが容易ではない生徒も多かったため、まずは気軽に手を挙げやすい場を提供しようと

考えました」(泉谷俊郎校長)

泉谷校長が着任した2020年、少子化による生徒数の減少やコロナ禍により、学食の経営悪化が課題となっていた。そこで学食の運営を地域の農業法人に依頼するとともに、生徒たちの学びの場にもしようと考えたのが「三高みんなの食堂プロジェクト（以下、食堂プロジェクト）」だ。コンセプトは、「SDGsの視点をもって、持続可能な食堂をみんなで作り上げ地域を盛り上げる」。

食堂に関心をもつことや、利用することも「参加」ととらえ、生徒全員を参加者としている。プロジェクト活動としては、食堂を良くするため



(左) 学食入口ののれんの文字は、地域産業の廃棄物である革の端材で内装・装飾チームが作成。
(右) 食堂を利用することもプロジェクトへの参加のひとつとして、全校生徒が関わっている。

取材・文／長島佳子



の課題を見つけ、自分の得意を生かすことができそうな分野で貢献したい生徒を「プロジェクトリーダー」と呼んでいる（2022年度のリーダーは52名）。あくまで自主的な立場のため、強制力はなく、評価もない。担当教員もつけておらず、先生たちも希望によって自主参加したり、生徒から求められたときに手助けする立場だ。

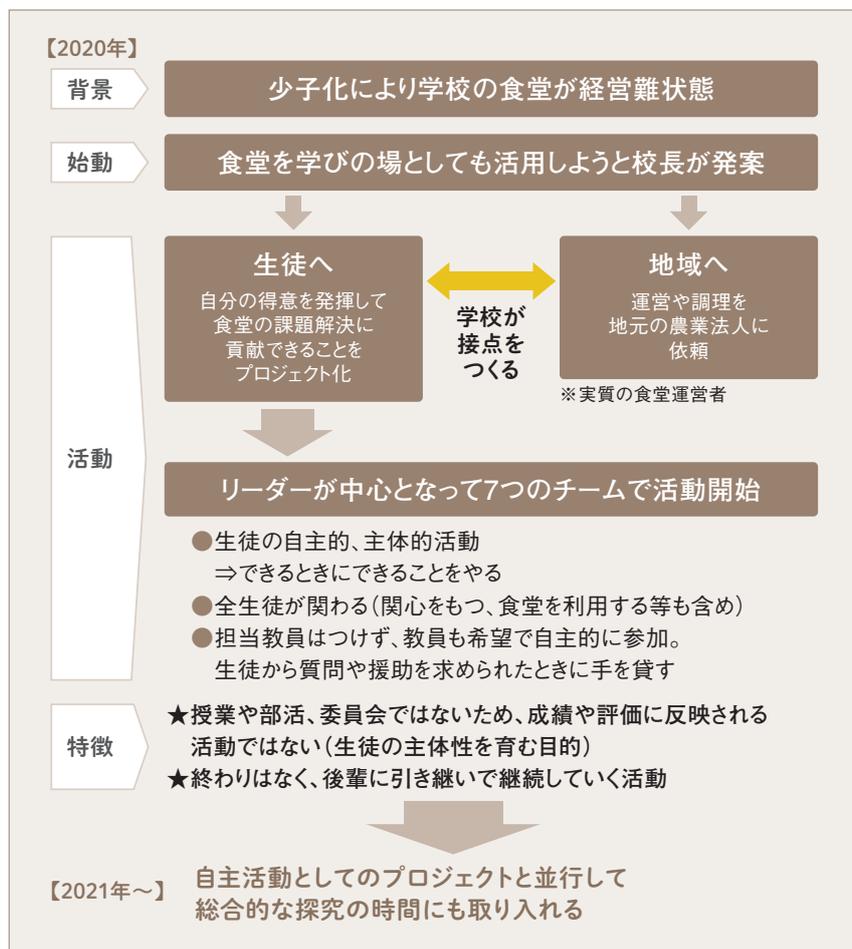
「評価がないので生徒たちは安心してチャレンジして失敗もできます。うまくいかないことを経験することも高校生には大切だと考えています」(泉谷校長)

リーダーたちは学校の中心となって、畑、マルシェ、イベント企画、内装・装飾、メニュー開発、広報、総務の7チームで活動している。例えば、

総務チームは活動に必要なお金の管理や食堂の利益を確保するための飲料の仕入や販売など、食堂の経営改善につながる活動をしたり、内装・装飾チームは地域産業の廃棄物や使われていないものを再利用して食堂のインテリアを作ったり、食器に使用したりしている。まさに起業家のような活動を実践しているのだが、泉谷校長は、アントレプレナーシップを意識していたわけではないと語る。

「主体性を育むために、食堂という身近な環境を提供しただけです。その身近さによって、生徒たちが自分で解決したいと思う課題を見つけやすく、助けが必要なことがあれば地域の大人に力を借りにいき、自分の強みを生かして挑戦でき

「三高みんなの食堂プロジェクト」の流れ



ているので、結果としてアントレプレナーシップにつながっているのかもしれない」(泉谷校長)

校内課題から始まる探究に プロジェクトを組み込む

食堂プロジェクトは、地域から注目され多くの取材を受けているほか、「高校生ボランティア・アワード2022」で大会委員長の「さだまさし賞」を受賞するなど、外部から高い評価を受けている。

リーダーを務めた生徒たちの自己肯定感が高まり、成長していく姿を見たことで、2021年度からは、総合的な探究の時間にも食堂プロジェクトを取り入れ始めた。探究に組み入れることで2年生の普通科全生徒が課題に取り組むことになった。

「探究は地域課題に取り組む学校が多いですが、本校の生徒にとっては、より身近な校内課題から入ったほうが自分ごとにしやすいと考えました。食堂プロジェクトは校内課題として関心が高く、生徒が多様な得意を発揮できます」(泉谷校長)

「プロジェクトではリーダーに手を挙げられなかったけれど、本当はやりたかった生徒も多かったようで、そうした生徒たちにもチャンスを与えられる良い機会となりました」(森 麻衣子先生)

探究の授業とすることで、日常のなかにいかに課題を見つけられるか、問いの立て方の練習から始めている。

「校内課題には2年生で取り組みますが、1年生では“日常を疑う”をテーマに、当たり前だと思っていたことを疑問文に置き換えて問いづくりをしています。身近なところに課題が存在していることや、課題を自分ごととして考え、解決



(上)畑チームは校内に畑を開墾し、大根やネギ、スイカなどを栽培。収穫物を食堂の食材として利用し、コストを下げる。(左)地域の生産者から規格外の野菜や廃棄される魚の部位などを引き受けて利用する、メニュー開発チーム。ハマチの中落ちが絶品ハンバーグになった。



自ら考案したオリジナルメニューや地域の野菜を、各地で開催されるマルシェで販売するマルシェチーム。



(写真右から)2022年春の卒業生の伊澤未波さん、大下真里奈さん、奥谷菜々美さん



策を探る力を体系的に身につけてもらいたいと考えています」(兼島 翼先生)

教員は、生徒と地域をつなげ 視野を広げるサポーター

リーダー経験者には、地域の人々や大学生との関わりで視野を広げ、自分のやりたいことを見つけた生徒も多い。取材時に偶然、食堂に手伝いに来ていた卒業生の一人の大下真里奈さんは、広報チームの活動に関わってくれた香川大学の学生の影響を受け、現在大学の創造工学部に進学。将来は地元の東かがわ市のブランディングに関わる仕事をしたいと考えているという。

「教員の役割は生徒と地域の接点をつくるなど、生徒たちの視野を広げてあげることです。好きなことの先に広がっている世界を知ると、生徒たちは自ら進んでどんどん動き始めます。自分の好きや興味から動くことで主体性を体感し、プロジェクト以外でも自ら動く力を身につけていきます」(泉谷校長)

身近なこと、自分の関心ごとから始まったプロジェクトのなかで、生徒たちは一緒に活動する大人から直接地域課題を見聞きすることで、地域のことが自分ごとになっている。自分たちの食堂を良くしたいという思いが、地域や世の中を良くしたいという思いへと広がることで、将来の夢を見つけるきっかけになっているようだ。

学校データ

1900年創立／普通科(単位制)／生徒数409名(男子212名、女子197名)、全日制(普通科、理数科)・定時制。
食堂プロジェクトのほかに、献血ボランティア活動や虎丸ゼミなど生徒主体の活動を重視している。

失敗も経験しながら、対象を考えて話す力がついた



3年生 食堂プロジェクト代表 亀井遼樹さん

プロジェクトリーダーだった先輩に勧められて、2年生のときから自分もリーダーの一人として活動を始めました。食堂プロジェクトの魅力は希望すればチームを複数兼務したり、自由に活動できること。自分も総務や広報の活動に参加していました。

例えば総務チームでは自分の発想で食堂の売上げを増やすために冷凍ジュースを仕入れて販売したり、広報チームではオープンスクールで食堂プロジェクトの宣伝をしたりしてきました。食堂プロジェク

トがやりたくて入学を決めた中学生もいたと聞いて嬉しかったです!

プロジェクトでは取材を受けたり、コンテストなどで発表する機会が多々あります。取材は月に2件くらい、発表は自分が担当したもので今までに10件以上経験しました。でも、最初のころは何をどのように話せばいいかわからずうまく伝えられていませんでした。失敗を通して、話す対象によって、相手の気持ちを考えて内容や話し方を変えていくとうまく伝えることに気づくことができました。例えば

環境系のコンクールなら、我々の活動が環境に貢献する部分に重点を置いたり、オープンスクールなら中学生に親しんでもらえるように、明るく楽しそうに話すなどです。

将来はゲーム業界で働きたいと思っていますが、食堂プロジェクトでの経験から、ゲーム業界で広報の仕事がしたいと考えるようになりました。好きなことを仕事で生かす方法を、プロジェクトのなかで見つけた感じです。総合型選抜で志望校に合格できたので、大学でさらに学びを深めたいと思います。

